

悪左府

平野正喜

2020・11

場割

序幕 吉野山蝦蟇祠の場

二幕目 土御門殿頼長居室の場

三幕目 三条藤原家成館裏手の場

大詰 左京藤原忠実館門前の場

役名

一、藤原頼長 実は 長子

一、藤原忠実（頼長の父）

一、馬子 四郎

一、馬子 六郎

一、源義賢

一、田楽姿の男 実は 藤原菅蒲若

一、奴蔵平

一、 奴 まんじ 萬治

一、 奴 しちのすけ 七之介

一、 奴 じゃくじろう 雀次郎

一、 奴 えいのしん 栄之進

一、 奴 太郎

一、 藤原家成 いえなり

一、 幸子 さちこ（頼長の妻）

一、 藤原兼長 かねなが（頼長の子・子役）

一、 吉野の上人 実は たきやしや 滝夜叉の怨霊

序幕 吉野山 がまのほこら 蝦蟇祠の場

平安時代末期。白河法皇の院政期。

春だが寒い吉野山の中腹。

本舞台二重舞台、遠方に桜の山々、平舞台下手

に二重舞台へのゆるやかな坂道、二重舞台の中

央に屋根付きの祠 ほくら、その左右は枯れすすき。

祠は茶色の幕で隠されている。

遠雷を思わせるドロンにて幕開く。

ト、平舞台上手板付にて馬子姿の若い四郎と年
かさの六郎。

四郎 さても、不思議なことよの。

六郎 何ぞ、不思議なことがあるかい。

四郎 この季節、吉野山といえは満開の桜を愛でに来るベ
きところ。なにゆえにこのような気の滅入る場所に。

六郎 それはそれ、忠実様には何ぞお考えあつてのことで

あろう。忠実様は帝をも思うがままにするという藤

原家の筆頭たる長者^{ちやうじや}。我々下々の者には思いの及ば

ぬお考えがあつてのことに違いない。めつたなこと

は言うまいぞ。

四郎 うむ。それにしても、一面の桜の中、なにゆえ、こ

こだけが枯れすすきに^{すす}煤けておるものかも不思議よ

のう。

六郎 それはまさにそうだが。それよりも、忠実様は何ゆ

えお一人で先に進まれたかの方か気にならんのか？

四郎 気にしても仕方あるまいて。忠実様には何ぞ考えあ

つてのことであるう。

六郎 こりゃあ、一本取られた。わはは。

ト、笑いはするが周囲の気配の重さに笑いは消え、そこにまたドロンと遠雷の音。

六郎

ここだけの話じゃが、女官どもは忠実様の夢見の悪さに関わりがあると申しておったぞ。

四郎

おお、聞いた聞いた。週に一度は夜中にうなされ、寝言を叫ばれるとか。それも、忠通様ただみちを許せぬとか、藤が散るとか、家が滅ぶとか。

六郎

こらこら、それ以上、言うてはならん。まるで、忠実様が御嫡男の忠通様を嫌きらうてらっしやるようではないか。忠実様に聞こえたらどうするのじゃ。

四郎

ここまで離れたら聞こえはせんやろ。それにしても、長子ながこ様の可愛さと利発さには、たまらんのう。「四郎、既に連れてって」と呼ばれてあ

のお可愛い瞳で見つめられたら、その日一日夢うつつじゃ。

六郎

忠実様もたいそうのお気に入りに入りじゃでなあ。二言目には「この娘が息子だったら」じゃから、そりゃあ、兄である忠通様が気を悪くするのも当然のことじゃ

て。

四郎

忠通様の任官が決まり、三条に移られて、みな、ホ

つとしたことよのう。忠通様はどうにも狡ずるいところ

があつて、皆、困つておつたことだし。あれでは忠

実様になおさら遠ざけられるのではなかるうか。

六郎

忠通様は御生誕からずっと長子様を羨うらやんでおつたこ

とは、まるわかりでのう。わしのような年かさの者

どもの間では心配の種じゃよ。いつか、良くないこ

とにならぬと良いが。

四郎

おお、怖い怖い。早いとこ帰つてもつきり酒にあり

ついて、田楽の稽古の続きをしたいものだ。

六郎

お前さんはホントに田楽が好きじゃのう。

四郎

おお、子供ができたら田楽役者にしてやるうかとま

で思つておるよ。

六郎

嫁に嫌われぬと良いがのう。ほほほ。

ト、そこにまたドロンドロンと遠雷の音

六郎

こりゃあ、雨になりそうだ。忠実様は、もし雨にな

つたら少し降りて休みどころで待つておれとのこと。

四郎

それじゃあ、さっそく。

兩人

下がるうかい。

ト、四郎、六郎上手へ入る。知らせの柝で茶色

の幕を落とすと祠が現れる。

花道より馬に乗った烏帽子・狩衣姿の忠実。思

いに耽りながらゆっくりと七三まで来て馬を止

める。

忠実

あれに見えるは蝦蟇の祠か。夢に見た通りの枯れす
すきの中、間違いない。

ト、馬をうながし下手の坂から二重舞台上が
り、祠の手前で馬を下りる。

忠実

エイ、ここまで来てはみたけれど、我をここに呼び
つけし吉野の上人とやら、出て来いと言わば、出て
来るものか。

ト、見渡すと、ドロドロと共に祠の扉が左右に

開き、中より大蝦蟇が現れる。忠実をあわてて
下手へしりぞき、馬の前足で止まる。馬は恐怖
で暴れるが、大きなドロンドロンド動かなくなる。

忠実

何奴じゃ。

ト、大蝦蟇は口を開く。ここより、滝夜叉の怨

霊の付け声（男声）にて。

大蝦蟇

忠実どの、よくぞ参られた。儂こそは吉野の上人と
呼ばれし者。

ト、言われて忠実は正気を取戻し、

忠実

そ、それは奇怪なり、上人ともあろう方が何ゆえそ
のようなお姿に。

大蝦蟇

これもまた修行ゆえ、気に召さるるな。それより、
時が移る。聞くが良い。

忠実

ハ、ハア

大蝦蟇

何度も夢で教え奉^{たてまつ}つた通り、そちの藤の家の大事を

告げねばならぬ。

忠通どのは忠実どこの種ではない。よって、藤の家を継がせてはならん。娘御むすめこ、長子どのこそ藤の家の次の長者なり。男として育てるが良からう。

忠実

た、忠通はわが子ではないだと？

しかも、長子を次の主にだと？

な、なにゆえ、そのような。

大蝦蟇

続きを聞け。その弟君の菖蒲若あやわかどのは、本日、まさに、馬にも乗れぬような体になるであろう。また、

長子どのは子の産めぬ体になる。月の物に煩わされず、政事まつりごとに励むと良からう。

忠実

な、なんと申された？

菖蒲若と長子の身に大難ありとでも言うのか？

大蝦蟇

二度とは言わぬ。

ト、そこに雷鳴と稲光。忠実と馬は落雷に触れたのか倒れ伏す。ドロドロにて、祠の後ろから古びた傾城姿の滝夜叉たきやしやの怨霊が現れ、妖力（仕掛け）にてススキを二手に倒して前に出る。

滝夜叉

ヤレ、愉快なり、我が蝦蟇の妖力にて藤の家の長者も思うがままじゃ。

思い起こせば百三十余年前、父上・将門公まさかどを射殺いころしし

たという俵藤太たわらのとうた。その藤太に連なる藤の家の者ども

の、この日の本の真まことの主でもあるかのような振る舞

い。ええい、許し難し。わが妖力にて、打ち倒して

見せんと思えども、大宅太郎おおやのたろうみつくに光圀との争いで生身

を失い怨霊と成り果て、残るは蝦蟇使いの力のみ。

藤の家の長者を誘い込み、大蝦蟇の力を用いて少し

ずつ内側より崩すしかあらず。エエイ、口惜しい。

じゃが、必ずや、父上の恨みを晴さん。エエイ！

ト、滝夜叉の怨霊が手を振るとドロドロにて大

蝦蟇がつぶれるようにススキの中に消え、滝夜

叉の怨霊の手に蝦蟇色の鞍布が現れる。

知らせの柝で、鞍布は差し金の仕掛けにより馬

の背に移る。

滝夜叉

これで良い。これで馬に乗り移りし大蝦蟇を介して、
ゆっくりと時をかけて忠実に憑とりつかん。事を急せい

て大業半たいぎょうなかばで倒れられた父上・平将門たいらのまさかどとは違い、自

らの意志で怨霊と化した我にはいくらでも時間がある。藤の家の者たちよ思い知るが良い。ハハハハハ

ハ。

ト、滝夜叉の怨霊は祠の裏へ戻り、ドロドロにて、妖力（仕掛け）でススキを元通りにして姿を消す。

知らせの柝で上手袖から四郎と六郎。

兩人

忠実様ア。

ト、二重舞台への坂に駆け寄ったところで、倒れている忠実を見付け、

四郎

忠実様があんなところに。

六郎

これはいかん、急がねば。

ト、坂を駆け上がって忠実を抱き起す。忠実は気づいて、

忠実

こ、ここは。ウ、いかん、すぐに帰るのだ。馬を引
け。

六郎

ハハア。しかし、馬も。

ト、言いかけるや、馬は機械仕掛けかと思われ
るような不自然な所作で立ち上がる。

六郎はいぶかしみつつも、ホっとした顔で忠実
を促す。

忠実は四郎に助けられて馬に乗るが、乗った途
端にドロドロが鳴り、忠実の手足が引きつり、
表情が狂気じみたものに変わる。

四郎と六郎は恐怖の余り腰くだけになるが、

馬

(滝夜叉の怨霊の付け声にて)ゲコ

ト、鳴いた途端にドロドロが止まり、忠実の様
子も正常に戻る。

忠実は何もなかったように。

忠実

急ぐのだ。長子と菅蒲若に言い含めねばならん。急ぐのだ。

ト、馬をせかし、腰を抜かしたままの四郎と六

郎を下手に残し花道へ。

幕

ト、忠実は花道七三にて、

忠実

夢に出^{いで}し吉野の上人、急ぎ逢いに来たはずが、思いもかけぬ大蝦蟇姿。しかも知らせは藤家^{とうけ}の兇変^{きょうへん}、気

ばかりせいて、

ト、言うを柝の頭。

忠実

馬が合わぬわ。

ト、向うから叫び声。

声

(声のみ) 忠実様、一大事にございます。長子様と菅蒲若が落馬されてございます。忠実様ア!

忠実

ちいい、何たる不覚。間に合わなんだか！

ト、極め、バタバタにて向うに入る。

幕

二幕目

土御門殿つちみかどでん頼長よりなが居室の場

二十年後、御所近くにある頼長の館・土御門殿。

本舞台正面高足の二重舞台、本屋根付き、白木造りの屋体、中央に階、

二重舞台の上手に御簾が下りている一間、中央

の広間の襖ふすまは閉じている。平舞台下手に廊下、

庭と松の木。全て、夕方の土御門殿頼長の館の

体。

着付きつけ袴かみしもの奴やつこ六人が二重舞台広間の前に板付。琴

歌にて幕開く。

ト、静かな合方になり、

蔵平

サテ、頼長様には飛ぶ鳥を落とさんばかりの出世に

て、左大臣さだいじんを拜命され、

萬治 我らが主あるじ、義賢様よしかたともども三日続きの祝いの宴、

七之介 警護を務める我らにも異例の恩賞、ありがたや、

雀次郎 なにせ、我らは頼長様の、男ならざる秘密の掟、

栄之進 守りしことも義賢様の、厳命なれば命をかけて、

太郎 守りとおして勤め上げらん。

お、戻られたようじゃ。それではお迎えに。

六人 参ろうかい。

ト、奴六人は中央の襖を開けて中へ。琴歌止ま

り、襖が閉じる。

向うよりゆつくりと狩衣、指貫に烏帽子のすつ

きりとした男姿で頼長（長子）が歩いてくる。

その後ろから着付袴、大小姿の義賢がよろしき

距離を空けて従う。花道七三にて。

頼長 （男声で）なにやら後ろから声がするようだが。

義賢 おおかた、家成いえなりどのにございましょう。

頼長 困った男だ。好かぬ。いつそ、亡き者にできぬか？

義賢 そのようなことをおっしゃられては。

頼長 政事まつりごとも学問まなもできぬ貴族など、おるだけ害悪である

う。くだらぬ企み事を思い付いて世を乱す前に取り除いておくのが道理というものだと思うが。

義賢

いえ、そればかりは。

ト、バタバタにて花道よりドタドタと狩衣、指貫に烏帽子の家成。烏帽子が曲がっていることにも気づかず。

家成

待たれよ、待たれよ、左府さふどの、待たれよ。

ト、七三で待っている頼良と義賢の間に入る。

義賢はヒザをつき黙り込む。

家成はしげしげといやらしい目つきで頼長を上から下まで見回してから、

家成

左府どの、何故、そう冷たくなさるのじゃ。この家成、帝より五位を授かる家柄の長おさ。その儂を。

ト、頼長はなかばうんざりと。

頼長

わたくしが冷たいとは、どういうことで？

家成

（ダラダラと）儂わしが着座ちやくざする前に朝議ちようぎを始めなさるは、

その後も儂わしの素晴らしい言上ごんじょうを一顧いっこだにされず、仕

舞まには帝みかどへの謁見えっけんも認めて下さらぬ。なぜそれほど

儂わしに冷たくなさるのじゃ。

頼長

特にそのような。

マア、確かにわたくしは刻限を守らぬ方は大の苦手

でございますが。

ト、頼長は家成に見えぬように冷たく笑う

家成

苦手などと、そのような、お優しいものではありません

すまい。この儂わしが左府どのともっと近づきたいと思

うておるのにもかかわらず、このような（ト、義賢

を見て）流行はやりらぬ田舎者の源氏武士など従えて。

頼長

何と。

ト、家成を睨み付けるが、義賢の冷静な視線を

感じて気持ちを抑える。

家成

おお怖。これではそのうち、朝議の遅参だけで、わが館を打ち壊されてしまいそうじゃわいの。

ト、頼長はこれを無視して、

頼長

要件がそれきりでしたら、この辺で。

ト、頼長は花道から舞台下手へ進み、スタスタ

と袖に入る。義賢は後に従う。

家成は追うのを諦めた様子で花道から舞台上手

へ進み袖に向かってダラダラと歩きながら、

家成

ホンに美しゆうて怖いお方じゃ。しかも、他に並ぶもののない博識さに、朝議の者どもが「すごい左府

様じゃ」「怖い左府殿じゃ」「あれこそ悪左府あくさふじゃ」

と言いふらすのも当然のことじゃな。まあ、そこがまた、たまらなく良いのじゃがの。

ト、掌で顔をなめてニヤリとし、

家成

さあて、また、田^{でん}楽^{がく}の者どもを呼びいだすしよう

かのう。特に、頼長どのにソツクリなあ^あの男。また、

難題を申付けて困らせて楽しむとしようわいな。

ほっほっほ。

ト、家成が上手袖に入ったたところで知らせの

柝で、

太郎

(声のみ)左府どのお戻り。

ト、琴歌と共に、正面の襖が開く。

女房姿の幸^{さち}子と子の兼^{かね}長が中央に、奴六人が下手に居並んでいる。

義賢が下手廊下から出て上手に進み、奴と兼長の間に着座。

最後に烏帽子を脱いで髪を垂らした頼長が下手廊下から出て上手に進み、上座に着座。

幸子

頼長様、お帰りなさいませ。

一同

お帰りなさいませ。

頼長

(男声で) 皆の者、出迎えご苦労。兼長も母をわずらわず、賢き子であったか。

兼長

父上、御意にございます。

頼長

よし、頼もしく思うぞ。お前は藤の家の次の長者となるべき者。文武両道に励み、この父の望みに応えよ。

兼長

かしこまりましてございます。

頼長

よし、母と共に下がって休むが良い。

幸子

ありがとうございます。

ト、幸子、兼長の手を引いて立ち上がり、義賢

と奴たちの前を通って下手に進み、廊下から袖

に出る。

頼長、足を組みなおして女性の居住まいになる。

これ以降は長子として女声で。

長子

義賢どの、お勤めご苦労様でした。

義賢

何のこれしきのこと。我も奴どもも、何か起こりせば直ぐに動けるよう、気構えしが、何一つ事起こらず。気抜けするほどであった。改めて、頼長様。お

めでとうございました。

一同

おめでとうございました。

長子

ありがとうございます。そして、ここに居るのはわた

くしと、源家げんけの次期棟梁とも言われる義賢様、そし

て、気心知れた皆様のみ。どうか、ごゆるりと。

そうそう、ここでは、長子とお呼びなさいませ。

義賢

ははあ。

奴たち、息を吐いて緊張を解く。

義賢

それにしても気になりしは、右大臣・忠通どの。頼

長様の、ア、長子様の左大臣ご拜命を喜ばれるはず

無しとは、真のことかと。

長子

真に御座います。わたしくが五歳になりし頃、兄・

忠通は任官して館を出ましたゆえ、詳しくは知りま

せぬが、父に疎うとまれていたとのことで、わたくしと

も縁がありませぬ。共に帝を守り奉りたてまつ、政まつりごとを行う左

右の大臣として、話し合わねばならぬことも少な

らず、懸念ばかりが頭に浮かびます。

義賢

そういえば、長子様は五歳より前のことを覚えてら

っしやぬとは真で御座いますか？

長子

それも、真で御座います。父が言うには五歳の春に父の馬に勝手に乗って落馬し半死半生となり、その折に憶えを無くしてしまひしと聞きました。

義賢

そのお父上の厳命により、長子様が男ならざりしことを漏らすものは一人としておらず。お父上のお力には、恐るべきものがございますな。

長子

わたくしは、時々、本当に怖くなる場合がございます。

義賢

という。

長子

父上のあの力、尋常ではありませぬ。あの日、父上
が幸子と兼長を連れて現れ、わたくしの表向きの妻
と子にせよと命じられた時、底知れぬ何かに心が震
えました。しかも、兼長は日に日にわたくしに似て
きます。何をどうすれば、こんなことが。時折、父
上は、人ならぬ者の力を借りているのではなどとす
ら、考えてしまいます。

義賢

まさか、そんなことはありませんまい。のう、者ども。

兵蔵

義賢様のおっしゃる通りにございます。長子様。

義賢

さて、ではそろそろ。

ト、手を上げると、奴たちはそれを合図に、

一同 かしこまってございます。

ト、中央の襖をあけて奴全員が中に入り、長子と義賢は御簾が下りている上手の一間に移る。

姿は見え、声だけが聞こえてくる。

義賢 これでもう。

長子 では、義賢さま。

ト、閨事を思わせる間をおいて、

義賢 ご気分がすぐれぬような。平氏へいしのことでございます

か。

長子 はい。兄・忠通は義賢さまの敵かたきにあたる平氏の者ど

もと組んで次の帝を思うがままにしようと思ってお

るといふ噂まこと、真まことのことと分かりました。

義賢 我は源氏の棟梁・為義ためよしが息子。度重なる平氏の横暴

はもう許せませぬ。

長子

そこですが、義賢どのには、今、鹿ヶ谷ししがたににおいて

の俊寛僧都しゅんかんそうずと平氏討伐の策を練っていたただきたいの

です。

義賢

成る程、俊寛どのですな。ん？

ト、義賢は急に御簾を開いて、

義賢

何奴じゃ、そこにおるは！ エエイ、奴ども、出合

え。

ト、叫ぶと、庭の松の木の陰から田楽姿で覆面

の男が現れる。上手から奴どもが入ってこれを

追い、殺陣となる。田楽男は足が悪く、杖をつ

いているが、杖を上手に使用って奴を翻弄する。

長子も御簾をまくって様子を伺うと、ちょうど、

田楽男の覆面の一部がめくれ、目線が合う。

長子

エ！

ト、長子は引き込まれるような思い入れ。その

後も、奴たちは田楽男に翻弄され、下手にて居

並ぶもすり抜けられ、田楽男は花道七三にて長

子に向かい、

田楽男 この次こそは、

ト、言うを柀の頭。

田楽男 名乗らせたまえ。

そのまま奥に駆け入る。

ト、義賢は御簾の間を出て中央に立ち、

義賢 足の悪し男一人、召捕れぬとはなんたる不届き。

萬治 申し訳ありません。

義賢 エエイ、追え、追え。

萬治 かしこまってございます。

ト、奴どもも花道を走って入る。

義賢は地団太を踏んで悔しがるが、長子は放心
状態で花道の向こうを見たまま。

幕

三幕目 三条藤原家成館裏手の場

翌朝の日の出前。身の丈ほどの土壁の長い塀。

下手に勝手口。高級貴族の館の裏側の体。

梵鐘にて幕開く。

ト、黒づくめの姿の栄之進が上手から、同じく

雀次郎が下手から。中央で立ち止まり、

雀次郎 居たか？

栄之進 う。

雀次郎 それはならん。ここは家成どのがお館やかた。勝手な真似

をしては、義賢様の迷惑。しかも、長子様から隠密

裏に顔のみ改めたいとの思召しおぼしめ。

栄之進 では、それとなくあの男が勝手から出て来るように

仕向けましょう。

雀次郎

頼み申すぞ。

ト、栄之進は下手勝手口を静かに開けて中へ。

雀次郎は花道手前に移り、手持ちの笛を取り出

すと、奥に向かってピーと一音鳴らす。

奥から尼僧姿、白頭巾にやつした長子が出て、

足音立てずに七三へ。

雀次郎

まもなく出てくるものと。

長子

(女声)ご苦労様でした。ここはわたくしひとり。

雀次郎

かしこまりました。

ト、勝手口から栄之進が出て来て雀次郎に向か

い手を上げてから上手へ入る。雀次郎は長子に

目礼して下手に入る。

長子、足音立てずに中央へ。そこに勝手口が開

いて田楽姿に覆面の男が杖を突きつつ現れる。

田楽男

我に御用とはどなた様か。

ト、尼僧姿の長子に気付いて、

田楽男 あ、姉上？

長子 え？

田楽男 姉上に違いない。この菖蒲若あやわかを訪ねてくださったと

は。姉上、本当に本当にお会いしとうございました。

ト、菖蒲若は涙を流すが、長子はまったく合点が行かず、

長子 わたくしに弟はおりませぬ。それに、菖蒲若とはわ

たくしの幼名。なぜ、それを名乗りまするか。それ

よりも貴殿は何故わが館に忍び込まれましたのか、

そして、その目、わたくしと全く同じその目を見て、

貴殿の顔を、顔を見たくて参りましたところ。

ト、矢継ぎ早に言いかける長子を田楽姿の男は

引き留めて、

菖蒲若 やはり姉上は、この菖蒲若のことは覚えていらっし

やらすか。無念でございます。真に無念にござい
まする。

五歳のみぎり、姉上と共に馬から落ち、気が付くと
私は一人で介抱されており、姉上のお姿を探そうに
もケガがひどくて起き上がれずにいたところ、遠出
から帰られたばかりの父上にそれはそれは強いお叱
りを受けたのでございました。しかも、その日のう
ちに館の外に出されてしまったのでございます。

ト、悔し気に語る菖蒲若に長子はただ驚くば
かりで、

長子　　そ、そんなことなど。

菖蒲若　　続きをお聞きくださいませ。私は何も分らぬまま、
二度と館に入ることには許さぬという父上のご命令で
厩番うまやばんの四郎の家にて育てられてございます。

長子　　そ、それでわたくしと二度と会えなかつたとおっし
やるのですか。

菖蒲若　　その通りでございます。私は密かに元服を迎え、に
も関わらず、菖蒲若に代わる名前を与えられず。今

日まで過ごして参りました。

四郎からは、姉上が憶えを無くされていること、私
が二度と馬に乗れぬ身体であり、藤の家には無用の
存在であることのみを密かに教えて貰いました。

長子 なんとということを。

菖蒲若 父上の館に入れて貰えない私は、四郎に教わりし田
楽のみを心の支えにしております。先般、家成さ
まお抱えの田楽の者どもが近くに参りしとき、一大
決心して四郎の元を逃げ出して紛れ込み、父上や兄
上の目に触れぬように姉上の姿を一目見ようと、
長子 それで田楽姿で？

ト、菖蒲若は少しずつ長子に近づきながら熱情
をこめて、

菖蒲若 姉上、菖蒲若は、菖蒲若はこの二十年の間、いつか
姉上にお会いすること、それだけが密かな望みで
ございました。五歳まで私はずっと姉上の後を付い
て歩く気の弱い弟でございました。そのことまで、
お忘れでございませうか。姉上。

ト、菖蒲若は長子の近くまで来る。

思いに沈んでいた長子は、やっとこれに気づき、慌てて後ずさる。

長子

な、なにを言われますのか。確かにわたくしは五歳のみぎりより前のことを覚えておりませぬが、菖蒲若なる弟がいることなど、信じられませぬ。

ト、頭を振る。そこで、菖蒲若は覆面を取ろうとうなじに手を回す。すると、ドロドロと共に、差し金の仕掛けにより蝦蟇色の鞍掛布が空を飛んで土堀の裏に入る。

そして、菖蒲若の背後の土堀が崩れ、中から大蝦蟇が現れる。ドロンと打ち上げてから、以後、滝夜叉の怨霊の付け声（男声）にて。

大蝦蟇

顔を見せてはならぬ。

ト、バタバタにて大蝦蟇は両手を振り上げ、菖

蒲若は連理引にて両手を上げたところを柝の頭。

大蝦蟇が両手を下げると同時に田楽男も手をぶ

らりと下げ、長子を見つめたままで不動となる。

長子 (男声に戻って) な、何奴？

大蝦蟇 藤原頼長どのか。やつとお眼にかかることができ申した。我こそは吉野山の上人と呼ばれし者。

長子 な、なんと。(気持ちを落ち着けて)

否、そんなはずはあるまい。吉野山の上人は既に入滅されたと聞く。そして、その奇怪な姿。どこぞの化け物が、上人の名を語らっておるに違いなし。何奴じゃ、本性を示すがよい。

ト、白頭巾を脱ぎ捨てて蝦蟇を睨み付ける。

大蝦蟇 さすがは悪左府と呼ばれる頼長どの。騙されてはく

れぬか。ふふふ、それで良い。それで良い。我こそ

は藤散らしの大蝦蟇。おのれらの藤の家を根絶やし

にせんとする者なり。

長子 な、なんと。奇怪な。

ト、長子は懐中から短刀を取り出し身構える。

大蝦蟇

そのようなものは私には利かぬが。うぬが豪胆さと博識、ほればれするのう。とはいえ、これも縁^{えにし}。先に悪左府どのから葬ってくれよう。

ト、菖蒲若の前にのっそりと出ようとしたところ

で、

大蝦蟇

ぐう、なぜ体が前に出ぬのじゃ（女声で）こ、これはやはり。

ト、蝦蟇はたじたじと菖蒲若の後ろに戻る。

大蝦蟇

（女声のまま）くうう、お前はいったい何に守られておるのじゃ。おのれらが幼き日、あの落馬の時に
も何ゆえかお前は傷一つ負わず仕舞。我が呪法によ

り、お前は子の成せぬ身体になるはず成りしはずが、

お前自身の力にて憶えを消すことでわが呪いを無に

帰した。たかが五歳の小娘にそんなことができるはずなしと、いぶかしくてならなんだが、やはり故^{ゆえ}あつてのことか。

長子

（油断なく刀を抱えたまま）うむ、貴様の真は女子^{おなご}か。我が力にて我が憶えを消したと？ 全くもつて覚えなしが、幼な子の災いもまた、うぬの仕業であつたとは。今日^{こんにち}初めて知つたことだが、

ト、不動のままの菖蒲若の方を見て眉をしかめ、

長子

我の弟だといふこの男をこのような身体にし、このような悲しき定めに追いやつたのも貴様の仕業とは。エエ伊許せぬ。何故、我が一族を呪うのかはわからぬど、その邪なる執念を我が刀にて鎮めてみせん。化け物、そこになおれ。

ト、大蝦蟇は地団太を踏み、

大蝦蟇

ええい、悔しや、悔しや、手も足も出ぬとは。うむ、待てよ。

ト、ひとりごちて、

大蝦蟇

何にかはわからねど、守られている者を害すること
をできるのは肉親の者のみと聞く。しかも、まだ顔
をみせておらぬから、我が思いのままじゃ。よし、
こうじゃ。

ト、バタバタにて、大蝦蟇は連理引にて菖蒲若
を動かし、長子に襲いかからせる。

無表情で人形のごとき動きながら杖を振り回し
て襲ってくる菖蒲若に長子は恐怖に襲われ、

長子

な、何をするのじゃ。

ト、長子は菖蒲若の身を避けながら大蝦蟇に切
りかかろうとするが、大蝦蟇の連理引で菖蒲若
が間に入る形になり、長子は菖蒲若の脇を貫い
てしまう。菖蒲若はうつぶせに倒れる。

長子 (女声で) ああ、な、なんということ。あ、菖蒲若
どの、菖蒲若どのっ。

ト、長子が頭を抱き抱えると菖蒲若は苦しげな
息使いで顔を上げ、

菖蒲若 姉上。もはやこれまで。

長子 おお、菖蒲若どの、死んではならぬ。ここで命果つ
るとは、あまりに、あまりにそなたが不憫じゃ。

菖蒲若 (息絶え絶えで) どうやらわたくしの命はここまでの
様子。

長子 な、なぜにそのようなことを。父上を、私が父上を
説得するゆえ、このような理不尽はもう続かぬよう
に。

菖蒲若 無理でございましょう。父上、御館様は何者かに心
を握られておいでの様子。その厳命により、忍んで
きた幸子との間に子をなした私も、御館様に取り憑
いた何者かに正気を奪われていることと、後に気づき
ました。

長子 なんと、それでは、兼長は菖蒲若どのの子だと言わ

れるのか！確かに、私の子としか思えぬ面差し。

そうか、そうだったのですか。では、なおさら、父

上にこのことを！

菖蒲若

ご無理をなさいませぬことを。私にも薄っすらと御

館様に取り憑いている者の真がわかって参りました。

姉上のみの方では及びますまい。

大蝦蟇

それ以上は言わせぬ！

ト、大蝦蟇は長子に背後から襲い掛かろうとす

るが見えない方に止められる。大蝦蟇は悔しそ

うに、

大蝦蟇

まあ、良いか。もう息は持つまい。

菖蒲若はぐったりとなり、

長子

菖蒲若どの！

菖蒲若

これで良いのです。姉上。兼長のこと、宜しくお願

い申し上げます。そして、御館様には決して油断な

されませぬよう。ああ、姉上の胸元で最期とは夢の

ようでございます。おさらば。

ト、菖蒲若はこと切れる。

大蝦蟇

藤の家を内側より崩したしとの我が望み、これで一つ成就したとしよう。今日はここまでで良い。エエ
イ。

ト、大ドロにて大蝦蟇は長子を避けて花道へ進み、スツポンから煙と共に下がる。

大ドロを打ち上げると、上手より栄之進、下手より雀次郎が出て、

雀次郎

ヤヤ、これはいかに！

ト、雀次郎は放心状態の長子の前に膝をつく。

栄之進は田楽姿の男の脈を取り、

栄之進

すでに手遅れ。いかにいたせば。

雀次郎

義賢どのお呼びして、ご采配をあおぐのだ。

ト、バタバタにて花道より着付袴、大小姿の義

賢が駆け寄り七三にて、

義賢

いかにした？

雀次郎

長子様はご無事でございますが、さて、この男は、

ト、栄之進に促すと、

栄之進

どうやら長子様が刃にて落命せし様子。この男は家

成さまお抱えの田楽どもの一員とか。

義賢

なんと！ それはいかん。しかも、その土堀の崩れ、

これも長子様の仕業ゆえか？

栄之進

わかりませぬ。長子様は我々を遠ざけられてお一人

で相對してらしたゆえ。

義賢

ウム。

ト、少し考えてから手を打ち、

義賢

奴ども、出合え。そして、この土堀、すべて壊して

しまえ。そして、この男がその下敷きになるように

せよ！

雀次郎　かしこまりました！

ト、バタバタにて、上手と下手から残りの奴が

現れ、土塀を力任せに壊し始める。

義賢は長子を苜蒲若の遺体から引きはがして抱

きかかえ、

義賢　長子様。何があるうとお助けいたす。

ト、長子は正気に戻り、

長子　こ、これはいったい？

義賢　お気にされませぬよう。サ、少しも早う、この場か

ら。

長子　は、はい。

ト、義賢が長子に肩を貸して花道へ。

しかし、七三にて、ドロドロにて動きを止めら

れる。奴たちも静止する。唯一動ける長子、
ふと思いついて胸のあたりを手で押さえ、

長子

エイ！

ト、ドロドロが止まり、全員動けるようになる。
義賢は驚きつつも、そのまま長子を抱えるよう
に向こうへ急ぎ入る。

幕

大詰

左京藤原忠実館門前の場

一ト月後。鳥羽上皇が崩御し、保元の乱が勃発。
舞台上手に大きな門。扉は閉じられている。下
手はすすき野。空は赤く、御所が燃えている炎
が遠く見える。都の郊外にある藤原忠実の館の
門前の体。

太鼓の連打にて幕開く。

ト、バタバタにて、花道より鎧に怪我人姿の太

郎、下手より鎧姿の兵蔵が出る。

兵蔵 他^かの者は？

太郎 散り散りにて。しかし、忠実どの御館にて合流せん
と、言い合わせてございます。

兵蔵 良し。それにしても、急なことであつたな。

太郎 まさに。もともと義賢様を嫌いし家成どのは、館打
ち壊しの一件以来、義賢様のみならず、長子様まで
をも不倶戴天の敵^{かたき}として憎まれておりました。

しかし、帝が崩御された途端に、忠通どのと家成ど
のが手を組み「悪左府、頼長の謀反なり」などと騒
ぎ出すとは、驚くしかなく。

兵蔵 なんでも、夢に吉野山の上人とやらが現れて、長子
様と義賢様に謀反の心有りと言われたとか。笑止千
万の話だが、これに忠通どのが同調して騒ぎ立てた
ゆえ、このようなことに。

太郎 (驚いて) 吉野山の上人とは！

兵蔵 ああ、長子様の弟、菖蒲若君を死に追いやることに
なつた御敵、あの大蝦蟇の化け物の怪しき仕業に違
いなし。

それにしても、平家どもにかつがれた次の帝がこれ
にお墨付きを与えられるとは、いったい何というこ
とだ。

太郎

一にも二にも憎らしくは平家の者ども。そして、義
賢様と俊寛僧都の密談が漏れたのも、あの化け物の
仕業に違いありません。僧都もすでに捕縛され、明
日にも遠流えんるのお沙汰、世も末とはこのこと。

ト、太鼓の合図にて、兵蔵、花道の向こうを指
さし、

兵蔵

オオ、他の者たちが。オ、長子様も、義賢様もいら
っしゃるようだ。

ト、向こうより、鎧に怪我人姿の他の奴四人、
馬上に着付袴、大小姿の義賢、その後ろに四郎
と六郎に担がれた駕籠。花道よき所にて止まり、

義賢

ここまで来ればこちらのもの。御所に火をかけられ、

取るものも取りあえずここまで落ち延びたが、陣を

立て直せば、平家どもに劣る我らではない。皆の者、

良く生き延びた！

全員　　ハハア。

義賢　　それ、もうすぐ忠実どのの御館だ。ウム？　なぜ閉

門なのだ？　長子様が知らせ、すでに届けてあるは

ずではないのか？

萬治　　お知らせ申し上げましたが。

ト、駕籠の中から、

長子　　（女声）門前にて降ろしてたもう。わたくしが確かめ

ます。

ト、一行、下手に駕籠を移し、取り囲む形とな

る。

狩衣姿の長子が駕籠から降り、

長子　　わたくし自ら尋ねに参ります。

義賢　　そんな危ういことを。

長子

構いませぬ。この閉門、父上になにか考えがあつてのこと。であれば、わたくしでのうては、ご本心を答えて貰えますまい。どれ。

ト、義賢のそばをすり抜けて中央へ。門に向かつて、

長子

父上、ご開門を！

ト、門が少し開くと同時にヒュウという音とともに矢が長子の胸に突き刺さる。長子は仰向けに倒れ、バタバタと共に慌てて駆け寄った義賢が抱き起す。すると、門が大きく開き、狩衣姿の忠実が弓を持った姿で現れる。

義賢

忠実どの、いったいなぜこのような。

ト、忠実は抑揚のない話し方で無表情に、

忠実

黙れ、源氏の田舎侍めが。我、天道に従い、極悪人、

悪左府・藤原頼長を誅せしものなり！

ト、長子は虫の息にて、

長子 な、なんと、おっしやいました、父上？

忠実 そちが先月殺めしは、そちの双子の弟・菖蒲若なり。
実の弟を手に掛けるとは決して許せぬ所業。

ト、長子は驚き、義賢と顔を見合わせて、

長子 で、では、あの時、家成どのの館にいたのはやはり

忠実 真の弟なりしか。父上、何故にこのようなことに？
そちの兄の忠通は我が子にあらず、そちの弟の菖蒲

若は馬にすら乗れぬ身となった。これらはすべて、
吉野山の上人様のおっしやられた通りのこと。それ

故、上人様の勧めにより、男ならざるそちを長者に
決め、男として育てたのだ。

長子 父上、わかりませぬ。なぜにそこまでその上人とや
らの思うがままに？

忠実 聞きたいと申すか？ では、聞かせてやろう、それ

はな、それはな、ぐおお！

ト、忠実は急に苦しみだす。ドロドロと共に、

忠実の背後からススキを割って大蝦蟇が現れる。

四郎、六郎は恐怖にかられて悲鳴を上げながら

下手に逃げ入る。

以後、滝夜叉の怨霊の付け声（男声）にて。

大蝦蟇

それもこれもお前の父の心の闇が招きし事。

ト、長子、虫の息ながら

長子

お、お前はあの時の！

大蝦蟇

ヤレ、愉快なり、藤の家の長者を誘い込み、蝦蟇の

力を用いて少しずつ内側より崩すという我が願い、

いよいよ成就の時を迎えん。生身を失い、怨霊と化

してから気の遠くなるほどの時を経つつ、藤の家に

呪しゅの種を蒔き続けてきたが、自分の息子を嫌い、娘

に許されざる欲を持った忠実どののお蔭で、その種

が芽を出し黒い花が咲いたのだ。

長子 な、なんとということ。

大蝦蟇 ところが、だ。頼長、お前には亡き母の靈魂の守り

厚く、肉親ではないいずれの者にもお前を傷つける

ことは叶わぬ。このままでは手も足も出ぬゆえ、過

日は菖蒲若を操りて挑んだが、事が成る前にお前に

防がれ、無駄骨を折った。

だが、お前の父親が正気を失うほどの怒りに身を任

せる時を逃さず事を起こせば、出来ぬことはない。

そこで馬を介して忠実に憑とりつきつつ、お前が許し

難い罪を犯すように仕向けたのだ。

お前の命運が尽きれば、藤の家の残る者どもは小者

ばかり。放っておいても忠通の馬鹿者が内側から崩

してくれよう。ついでに、目障りな源氏の者どもも

滅ぼしてくれるわ。源氏の棟梁、為義とやらも、今

頃、討ち取られておろう。ワハハハハ。

義賢 な、なんと、父上まで！ 許さぬ！

ト、長子を抱えたまま長刀を振るうと、大蝦蟇

に届きはしたが、傷一つつけられず跳ね返され

る。

義賢

そ、そんな。ぐう、無念だ。勝てぬのか、この妖怪
に一太刀を浴びせることすら叶わぬのか。せめて、
この妖怪の正体がわからぬものか！ エエイ！

ト、悔しがると、長子は苦しい息を吐きつつ、

懐より筒状に丸めた源氏の白旗を取り出し、

長子

よ、義賢様、これをご覧あれ。

義賢

こ、これは父・為義から聞きしも、行方知れずとい
う源氏の白旗！ なぜに今まで長子さまが？

長子

五歳のみぎり、この者の仕業による落馬にて憶えを
なくせし私が身に着けていたもので、聞けば、亡き

母上様の形見とのこと。元は源氏の血の源たる清和せいわ

の帝が拵こしらえさせ、その念をこめられたもので、平時

に男が持てば世を乱すとの謂いわれにより、帝の血を引

く母上が守りし宝。後に乳母から、いつか、悪政が

蔓延はびこりし時は、武士の棟梁に渡すことでその力を治

世に生かせとのご遺言を賜っておりまして。

しかし、わたくしは左府の任にありながら、我が女

ならぬ男ならぬ数奇な定めと、悪左府とまで呼ばれる激しき気性を呪い、平将門さまのような、荒ぶるう力をお持ちの方に、この白旗をお譲りするつもりでございました。

大蝦蟇 （女声に戻って）な、なんと、申した。父上のような、じゃと？

ト、蝦蟇は驚くが、長子は構わず、

長子 義賢さまはお力はお持ちですが、お優しいお方。そして、都を守護するお方。わたしは今日こんにちまで悩み、迷いつつ、肌身離さず持ち歩いておりました。私のこの愚かな迷いが、このような災いを招いてしまったのでございましょう。

ト、長子は苦しみつつも続ける。

長子 先に、家成どのが館の裏にて、この大蝦蟇と相対し
のち、皆が金縛りにかかりしが、衣の上からこの旗
に触れたところそれがたちまちに解けたこと、まさ

に、白旗の霊力のお蔭。

ト、長子は最後の力を振り絞り、

長子

化け物め、聖なる力を受けるが良い！

ト、白旗を大蝦蟇に向ける。すると、大蝦蟇は

俄かに苦しみだし、

大蝦蟇

ぐおおおお！ 我が父上が得られたはずの白旗の威

力に、我が責められるとは、なんたる皮肉！ 工工

イ、もう、ダメじゃ。今こそ、我が美しき姿を現さ

ん！

ト、大蝦蟇はつぶれてススキの中に引き込まれ、

スッポンから煙と共に古びた傾城姿の滝夜叉の

怨霊が現れる。

長子

よ、義賢様、我が命と、この白旗、義賢さまに差し

上げます。この怨霊を退け、源氏の再興を。

義賢

承った！

ト、義賢が白旗を受け取ると、雷鳴のごとくド

ロンが鳴り響き、忠実が目覚める。すっかり怨

霊の憑物は落ちており、

忠実

こ、ここはどこじゃ？

ト、死を迎えようとする長子に気が付き、その

瞬間、全てを思い知り。

忠実

な、長子！ こ、この弓は？ わ、儂は何故このよ

うなことを！

ゆ、許してくれ長子、儂はなぜ、お前を討ってしまった

ったのだ、なぜだ、教えてくれ長子！

ト、弓を放り投げ、義賢から長子を奪い取って

抱きしめるが、長子は絶命する。

義賢は白旗を手に立ち上がり、

義賢

悪霊退散！

滝夜叉

ええい、ちよございな！

ト、義賢、奴たちと、滝夜叉の怨霊の立ち回り。

義賢たちは劣勢になるたびに白旗を広げ、怨霊

の靈力を削ぎ落していく。滝夜叉の怨霊は力尽

き、スッポンまで這い寄り、

滝夜叉

ええい、口惜しや！ 義賢、許さじ！ 我が呪いに

より、そちの命運は間もなく尽きる。じゃが、その

白旗が、その白旗が源氏を！ ええい、口惜しや！

ト、大ドロにて滝夜叉の怨霊はスッポンより煙

と共に下がる。大ドロを打ち上げると、

義賢

滝夜叉の怨霊、この源義賢が、

ト、言うを柝の頭。

義賢

退けたりーーー

長子様のご遺言、源氏の再興は我がなさん。

もし、怨霊が呪いにて、我が命運、近々尽きる定め

なりとも、この白旗のある限り、いつか我が子息が

源氏を再興し、平家をこの都から叩き出さん！

行くぞ、皆の者！

一同 オーーーー

ト、義賢、奴たち、バタバタで花道を威風堂々

と進み、七三で極まる。

舞台中央で忠実が長子を抱えて泣き伏すところ
で

幕

奴六人、キザミにて、花道を進み奥に入る。

義賢、白旗片手の六法にて奥に入る。

幕

本作の著作権は平野正喜にあります。

本作は有料ですが、上演・放送・出版・転載されない場合は、代金はいただきません。

上演・放送・出版・転載される場合の料金は、ランドッグ・オーグ平野正喜事務所のウェブページをご覧ください。あるいは、日本劇作家協会にお問合せください。代金の支払いにより、脚本の使用を利用者に対し非専属的に許諾します。